

『高麗国新雕大藏校正別録』の問題点

— 『本事経』 卷3 を中心として —

馬 場 久 幸

I. はじめに

高麗時代、モンゴル軍の退散を祈願して『高麗再雕大藏経』（以下、『再雕藏本』と略称）が彫造されたが、これは16年の歳月の末ようやく高宗38年（1251）に完成を見た¹⁾。『再雕藏本』の彫造に際し、宋本²⁾（『開宝勅版大藏経』、以下『開宝藏本』と略称）・丹本³⁾（『契丹大藏経』、以下『契丹藏本』と略称）・国本（『初雕大藏経』、以下『初雕藏本』と略称）の3つの大藏経が校勘された他に、智昇撰『開元釈教録』、円照撰『続貞元釈教録』などの経録も参考にされている⁴⁾。

校勘作業を担当したのが、守其⁵⁾をはじめとする教宗の僧侶らであり、各經典の誤謬を徹底して把握し一字も見逃すことがなかったという⁶⁾。その内容を

-
- 1) 『高麗史』 卷24 世家卷24 高宗38年 9月壬午条「幸城西門外大藏經板堂、率百官行香。顯宗時板本、燬於壬辰蒙兵、王與群臣更願。立都監、十六年而功畢。」
 - 2) 北宋の開宝5年（972）から太平興国2年（977）までの6年間で完成した最初の刊本大藏経である。『開宝藏本』は完成後に周辺諸国に下賜され、高麗にも991年に伝来している。
 - 3) 『契丹藏本』とは、興宗の重熙年間（1031～54）から造成が開始され、同20年（1051）頃に大部分が完成した大藏経である。
 - 4) 蔡尚植、「『高麗國新雕大藏校正別録』의 편찬과 자료적 가치」『한국민족문화』 46、2013、p.151。
 - 5) 『補閑集』 卷下「開泰寺僧統守眞 學博識精 奉勅勘大藏經正錯 如素所親譯（中略）今爲五教都僧統」
 - 6) 蔡尚植氏は、校勘した内容がわかる『校正別録』が大藏経研究の重要な書誌学的資料でもあると評価している。蔡尚植「『高麗國新雕大藏校正別録』의 편찬과 자료적 가치」『한국민족문화』 46、2013、p.160。

守其が統括して最終的にまとめたものが、『高麗国新雕大藏校正別録』全30巻（以下、『校正別録』と略称）である。

『校正別録』30巻の内容を見ると、巻1から巻11は大乗經、巻12から巻14は大乗論、巻15から巻19は小乗經、巻20から巻25は小乗律、巻26から巻29は小乗論などに分類されており、79件、70函、66部の經典が校勘されている⁷⁾。そして、66部の經典の校勘内容を見ると、①『契丹藏本』が正しいが『初雕藏本』と『開宝藏本』を並存させた例、②『契丹藏本』によって『初雕藏本』と『開宝藏本』の錯乱と脱落を補足した例、③『初雕藏本』と『開宝藏本』を捨て『契丹藏本』だけを採用した例、④『契丹藏本』だけにあり、それを採用した例、⑤二本・他本・諸本・東北二本（『初雕藏本』と『契丹藏本』を意味する）で『開宝藏本』を校勘した例、⑥『初雕藏本』と『契丹藏本』によって『開宝藏本』を校勘した例、⑦『契丹藏本』になかったり、錯誤がある例、⑧『初雕藏本』の特殊性が見える例、⑨三本がすべて欠けていたり、誤謬である場合の例、⑩その他の校勘例、などの10種に分類されている⁸⁾。この『校正別録』の存在により、『再雕藏本』が内容面において高い評価を受けている所以となっている。

さて、『校正別録』に関する研究としては、校勘内容を詳細に分析するものが主であり⁹⁾、その資料的な価値を評価したもの¹⁰⁾や、そこに記されている刻工者について検討したもの¹¹⁾などがある。つまり、校勘作業の内容やその背景

7) 蔡尚植、前掲論文、p.158。

8) 吳龍燮「高麗國新雕大藏校正別録 研究」『書誌學研究』創刊号、1986、pp.222～235。鄭承碩編著『高麗大藏經解題』1、高麗大藏經研究所、1998、pp.20-23。

9) 吳龍燮、前掲論文、1986。姜順愛「高麗國新雕大藏校正別録의 분석을 통해 본 초조 및 再雕大藏經의 변용에 관한 연구」『한국비블리아』7、1994。藤本幸夫「高麗大藏經と契丹大藏經について」、氣賀澤保規編『中國佛教石經の研究—房山雲居寺石經を中心に—』、京都大学学術出版会、1996。裴象鉉「『高麗國新雕大藏校正別録』과 守其—〈高麗大藏經〉의 校勘과 彫成에 반영된 13세기 佛教界의 現實認識—」『民族文化論叢』17、1997。崔哲煥「高麗大藏經의 校勘」『月雲스님古希記念 佛教學論叢』、東國譯經院、1998。吳龍燮「『校正別録』의 完成과 入藏에 대한 考察」『書誌學研究』18、1999。

10) 姜順愛「高麗大藏經校正別録의 學術的 意義」『書誌學研究』20、2001。蔡尚植、前掲論文。

11) 裴象鉉、前掲論文。崔然柱「刻成人을 통해 본『高麗國新雕大藏校正別録』彫成」『동아시아불교문화』15、2013。

に関する研究がほとんどであり、校勘記の後ろに収録された「其文」、「正文」、「正経」などと表記された文（本稿では以下、訂正文と呼称）に着目した研究は少ない。

筆者は以前、訂正文と『再雕蔵本』に入蔵されているその經典の本文（以下、本文と呼称）を比較した。その結果、それらには正字・俗字の違い、1行の文字数の違いがあること、本文の版木が完成してから『校正別録』の版木が雕造されるまでの間に、再校正していることなどを指摘した¹²⁾。しかし、『本事経』巻3の本文には686字の脱文があり、訂正文にはそれが補われていることを指摘したのみで、その原因について検討できなかった。

そこで、本稿では、『本事経』巻3の本文にはない686字の脱文の内容、本文と訂正文が異なる理由、などについて検討する。

Ⅱ. 『本事経』巻3

1. 『高麗国新雕大蔵校正別録』収録の『本事経』の校勘記

『本事経』7巻は、玄奘（602～664）が最初に翻訳した經典として知られている。この經典は、一切衆生が自身の行業によって受ける果報を説いており、「一法品」、「二法品」、「三法品」の137段（節）で構成されている。詳細に見ると、「一法品」は60段、「二法品」は49段、「三法品」は28段¹³⁾である。各段は、まず「私は世尊に従ってこのように聞いた。苾芻よ、当然知らなければならない（吾從世尊聞如是苾芻當知）」という長行ではじまり、最後に偈頌でその内容を要約する形式である。

『校正別録』収録の『本事経』巻3の校勘記には、次のように書かれている。

①この一卷経は、『初雕蔵本』と『開宝蔵本』が同じである。『初雕蔵本』

12) 拙稿「『高麗国新雕大蔵校正別録』の編集に関する一考察」『한마음연구』5、2020。

13) 鄭承碩編著、前掲書、pp.557～559。しかし、『仏書解説大辞典』では「一法品は無明蓋以下六十經。二法品は五十經。三法品は二十八經。計百三十八からなっている」とあり、「二法品」に1段分の違いがある（『仏書解説大辞典』10、p.190）。

と『開宝蔵本』は同じく43段から成り、『契丹蔵本』のみ18段である。こうした大きな違いがあり、文章と意味が最初から最後まで大きく異なるため、どちらを採用したらいいのかわからない。今、『初雕蔵本』と『開宝蔵本』を検討してみると4つの大きな錯誤があり、『契丹蔵本』には2つの事（正しい部分）があることから見ると、『契丹蔵本』が正しい。②この巻の品の名前は二法である。すなわち、最初から最後まで二法を説いているが、『初雕蔵本』と『開宝蔵本』は43段すべてが一法を説いているため、経名（品名）と意味が合っていないのが最初の錯誤である。③また、この巻の『初雕蔵本』と『開宝蔵本』の最初の2段と、第3段の最初の6行までが、諸本の初巻3幅の『心意経』の1段12行分である。『初雕蔵本』と『開宝蔵本』はこの部分を3度重写しているため、これが2つ目の錯誤である。④また、第3段中「一類有情」以下が、諸本の初巻7幅は『破僧経』1段17行となっているが、『初雕蔵本』はこれを重複して写している。これを41回も重写しているため、これが3つ目の錯誤である。⑤この巻の終わりの偈頌に「貪欲瞋恚癡 覆藏及惱忿 不恨嫉與慳 耽嗜慢將害」とあるが、これは諸本の第2巻9幅の結経の偈頌である。正しくは「貪恚及愚癡 覆藏惱忿恨 嫉慳與貪嗜 慢害將一切」である。少し異なるのみである。ところが『開宝蔵本』ではむやみに重写したため、これが4つ目の錯誤である。故に重大な錯誤であることを理解しなければならない。

今、この『契丹蔵本』は18段で、終始二分から成り、二果二纏で終るため、二法が品目と名義が合っている。これが1つ目の正しい点である。また、諸本の第4巻第7幅の結経の偈頌が「爲通達律儀 厭知不淨果 纏覺悟宴坐 愧所作尋求者」となっている。これは[前の]12経（段）を結ぶ1つの偈頌である。その「覺悟」以下の5経（段）が諸本の第4巻の巻初にある5経（段）である。纏経と果経、上の7経（段）は、『契丹蔵本』のこの巻（巻3）の巻末の7経（段）に該当する。即ち、列举と結びが相応しているため、これが2つ目の正しい理由である。余本は間違っているため、『契丹蔵本』を採用して正経とする。また、『初雕蔵本』・『開宝蔵本』を

見る人のために、次の正經すべてを収録する。¹⁴⁾

『初雕蔵本』と『開宝蔵本』の『本事經』卷3は43段で構成されており、重写されていることなど4つの大きな錯誤がある一方、『契丹蔵本』は18段で構成され、長行と偈頌の内容が合っているという2つの正しい点から、後者を採用したのである。そして、校勘記の後ろに採用した『契丹蔵本』の『本事經』卷3の正經、即ち訂正文を収録した。

ところで、『本事經』は全7巻のうち巻4を除いた6巻の『初雕蔵本』が残されている¹⁵⁾。該当する『本事經』卷3を見ると、『再雕蔵本』は全19張であるが、『初雕蔵本』は全33張であるなど、内容が大きく異なることがわかった。そこで、校勘記と『初雕蔵本』の『本事經』卷3の内容と対照してみると、次のような違いが見られた。

まず一つ目は下線部①にある通り、『初雕蔵本』の『本事經』卷3では「吾從世尊聞如是語」から始まる長行が43段であるが、『再雕蔵本』では18段である。二つ目は下線部②にある通り、『初雕蔵本』の最初に「二法品第二之一」とあるが、内容は終始「一法」を説いており、「二法」に関する内容が見当たらないため、項目と内容が一致していないことがわかる。三つ目は下線部③にある通り、『初雕蔵本』の第1段と第2段の内容が同じであり、さらに第3段

14) 『校正別録』卷19「此一卷經、國宋則同。同有四十三段、丹本唯有十八段耳。多少如是不同、文義始終迥異。如何去取。今檢國、宋本經、有四大錯。丹有二事以知其正。何則。此卷品名既是二法、則應始終唯說二法、而國宋本經四十三段、皆是一法、則名義不相當。是一錯也。又國宋本卷初二段及第三段前六行文即是諸本初卷三幅心意經一段十二行耳。國宋於此三重重寫。是二錯也。第三段中、一類有情已下、即是諸本初卷七幅破僧經一段十七行耳、國本於此重重寫之、其乃至於四十一重。是三錯也。其卷末頌云、貪欲瞋恚癡覆藏及惱忿不恨嫉與慳耽嗜慢將害者即是諸本第二卷九幅結經頌正云、貪恚及愚癡覆藏惱忿恨嫉慳與貪嗜慢害將一切。之小訛變耳。宋本於此閑重寫之、是四錯也。故知大錯耳。今此丹本十八段經、始終成就二分、終至二果二纏、皆是二法、即與品目名義相當。是一正也。又按諸本第四卷中、七幅有結頌云 爲通達律儀、厭知不淨果、纏覺悟宴坐、愧所作尋求者、則結十二經爲一頌。其覺悟已下五經、即是諸本第四卷卷初五經、其纏經、果經、已上七經即是丹本此卷、卷末七經耳。則列結相應、是二正也。餘本則非故、今取此丹本爲正。又爲看舊國宋藏者、具錄正經于左。」、『高麗大藏經』38、p.639c。

15) 域外漢籍珍本文庫編纂出版委員會編『高麗大藏經初刻本輯刊』36、中国社会科学院歴史研究所、2012。

の最初の6行「吾從世尊聞如是語苾芻當知我以～染汙由此為因身壞命終墮諸惡趣」までもがほぼ同じであることがわかった¹⁶⁾。四つ目は下線部④にある通り、第3段から第43段の内容（「吾從世尊聞如是語苾芻當知我以～僧和合令壞經劫無聞苦」）が繰り返して重写されていることがわかった¹⁷⁾。五つ目は下線部⑤にある通り、『初雕蔵本』第33張にある最後の偈頌が「貪欲瞋恚癡覆藏及惱忿不恨嫉與慳耽嗜慢將害」となっていることである。これは『本事經』巻2の第9張¹⁸⁾の偈頌であり、本来なら「貪恚及愚癡覆藏惱忿恨嫉慳與貪嗜慢害將一切」となるはずであった。『開寶蔵本』の『本事經』巻3がむやみに重写され彫造されたため、これを底本とした『初雕蔵本』にも誤りが生じたのである。

以上、『初雕蔵本』の『本事經』巻3は、『校正別録』の校勘記の内容と一致していることがわかる。

2. 『本事經』巻3の本文と訂正文との比較

『本事經』巻3全19張の本文と訂正文を比較した結果、本文の第18張13行目「等」と「離」の間に、訂正文では686字が挿入されている¹⁹⁾。しかし、前述の通りこの部分について校勘記には特に指摘がなされていない。

そこで、まず本文と訂正文の違いを示すと以下の通りである。

本文

「彼らは、諸法について知ろうとする時に、意でそれを知っているといえども、貪、瞋、癡などをおこさない。

諸の貪欲を離れ、究竟寂滅涅槃を証得するのである。そして、思惟をなし、世尊は、諸々の阿頼耶を恐れる者と常に断見に縛られた者のために、業果がなくならないことを知らせようとするのである。説かれた正しい法

16) 第3段は「慧眼遍觀」とあるが、第1・2段は「佛眼遍觀」となっている点が異なるのみである。域外漢籍珍本文庫編纂出版委員会編『高麗大藏經初刻本輯刊』36、pp.230～231。

17) 域外漢籍珍本文庫編纂出版委員会編、前掲書、pp.232～261。

18) 『本事經』巻2の第9張15行から17行まで（『高麗大藏經』巻20、p.418a）。

19) 『校正別録』巻19の第19張23行目7文字目「雖」から22張3行目「空性」まで（『高麗大藏經』巻38、pp.645c～646c）

は、時には正しくあらわれてみえ、得になることを知りやすくなるので、智慧のある者はすべての世間を真実に治めることを証得する。いわば、傲慢と愛欲と害のある阿頼耶をよく除滅して、諸の近道を断ち切り、正しい空性を証得し、すべての貪欲から離れ、究竟寂滅涅槃を証得するのである。
(以下略)」²⁰⁾

訂正文

「彼らは、諸法について知ろうとする時に、意でそれを知っているといえども、貪、瞋、癡などをおこさない。

①また意及び好醜の法を知っているといえども、貪欲心もなく、また瞋恚もないのである。なぜなら、愛と瞋などのすべての結縛を永遠に断ち切ったからである。そして、その身が相續して、世間に留まり、まだ般涅槃に入らなくても常に天人らが瞻仰し、礼拝し、恭敬に供養する。これを有余依涅槃界と名づける。どうして無余依涅槃界というのか。諸々の苾芻よ。阿羅漢を得て、諸の煩惱が尽き、梵行を立てて行為をすべて備えて、すでに生死煩惱の重い荷物を捨て、自ら最高の真理を証得し、すでに結縛を断ち、すでに正しく理解して解脱し、すでに遍知を得ている。彼は、現在受けている一切のものによって業に引かれる原因が無くなっているため、また求めない。皆、永遠に煩惱は滅しつくして、畢竟寂靜、究竟清涼で、潜んで現れない。ただ清浄なため、戲論する根本がない。このように清浄であれば戲論するもとがないため、有とも言えず、無とも言えず、また有であり、また無であるとも言えず、無いとも言えず、無いこともないとも言えない。ただ、言葉を施すことができないことを究竟涅槃と言わざるを得ず、これが無余依涅槃界である。

20) 『本事経』巻3「彼於諸法、求欲知時、雖復以意知於諸法、而不發起貪瞋癡等。離諸貪欲、證得究竟寂滅涅槃。作是思惟、世尊爲彼怖畏諸有阿頼耶者、恒爲斷見所繫縛者、令知業果無失壞故、所說正法現見、應時、易見、饒益、智者内證、一切世間眞實對治。謂能除滅憍慢渴愛、害阿頼耶、斷諸徑路、證眞空性、離諸貪欲、證得究竟寂滅涅槃。(以下略)」、『高麗大藏經』20、p.427c。

苾芻はこのように二種の涅槃界があることを知るべきである。」この時、世尊は重ねてこの意味を続けて偈頌で言った。

煩惱が尽き心が解脱すれば、最後に身だけを所持するので、有余涅槃と名づける。

諸行はなお相続されるが、受はすべて滅し、寂靜で永遠に清涼であることを、無余涅槃と名づけ、多くの戲論はすべてなくなるのである。

この2つの涅槃界は、最上であり、仲間になるのに無理がない。現在も来世も常に寂靜で安樂である。

②私は世尊からこのような言葉を聞いた。「苾芻よ。当然知らなければならぬ。二纏のために、諸天人が、一類は臆病で劣り、一類は勇猛なので、智慧の目があるものはよく観察しなければならない。何が二纏なのか。有見纏と無有見纏である。では、どうして天人の一類が怯えて劣っているのか。天人が有を好み、有を楽しみ、有を喜び、有を嬉しがるが、この有を滅すということであるが、こうした法門を説く時に、よく恭慶して心に刻んで聞けない。また、奉教心を受け入れられず、随順することができず、ただ、怯えて劣っているだけで、退歩して、恐れているのである。『私たちはその時、何を所有すべきか。私たちはその時どのように有すべきか』と言うので、このようなことが天人の一類の怯えて下劣な集まりなのである。何が天人の中で勇猛な一類なのか。言わば、この天人は有を恐れ、有を嫌い、毅然と無いということを追求して、諸々の苦法で逼迫しているため、執着を受け入れる。このように諸の悪見趣には、このような考えをおこして言うのである。『もし私が断壊すれば、隠没して現じない』。その時が寂靜と微妙であるというのである。即ち、これが勇猛である天人の一類である。また智慧の目があり、よく観察するのはどのような者なのか。聖なる声聞が如実に観察し、すでに観察しては如実に驕慢に振る舞わず、如実に驕慢に振る舞うことに頼ることなく、如実であることによって驕慢が生じず、如実にすることを得て驕慢に振る舞わず、如実にみて厭背が生じ、厭背してよく貪欲から別れ、貪欲を離れて解脱を得て、解脱して自ら私の生死が尽きることを知り、清浄な梵行を立てて、所作を整えて、もう輪廻

しないと了知して、こうして考えるのである。

世尊は、すべてがあるという阿頼耶を喜び楽しむことと、恒に常見のために縛られているものとは、有を滅すためである。説かれた正法が微細で、深く、見るのも悟るのも難しく、寂靜して勝妙で行うすべての境界が、考えと分別の及ばすところではない。これは智慧の目で詳細に見る者が証得した一切世間の真実の対治であり、驕慢と渴愛を無くし、阿頼耶を害するすべての経路を断じて、その真空の性品を証得するのである。

諸の貪欲を離れ、究竟寂滅涅槃を証得するのである。そして、思惟をなして、世尊は、諸々の阿頼耶を恐れる者と常に断見に縛られた者のために、業果がなくならないことを知らせようとするのである。説かれた正しい法は、時には正しくあらわれてみえ、得になることを知りやすくなるので、智慧のある者はすべての世間を真実に治めることを証得する。いわば、傲慢と愛欲と害のある阿頼耶をよく除滅して、諸の近道を断ち切り、正しい空性を証得し、すべての貪欲から離れ、究竟寂滅涅槃を証得するのである。

(以下略)」²¹⁾

21) 『校正別録』卷19「彼於諸法、求欲知時、雖復以意知於諸法、而不發起貪瞋癡等。雖復有意及好醜法、而無貪欲、亦無瞋恚。所以者何。愛恚等結皆永斷故。乃至其身相續住世、般涅槃、爲天人瞻仰禮拜恭敬供養。是名有餘依涅槃界、何名爲無餘依涅槃界。諸苾芻得阿羅漢、漏已盡、行已立、作已辦、捨重擔、證自義、盡有結、已正解了、已善解脫、已得遍知。彼於今時一切所受無引因故、不復希望、皆永盡滅、畢竟寂靜、究竟清涼、隱沒不現。唯由清淨、無戲論體。如是清淨無戲論體、不可謂有、不可謂無、不可謂彼亦有亦無、不可謂彼非有非無。唯可說爲不可施設、究竟涅槃。是名無餘依涅槃界。苾芻、當知如是名爲略有二種涅槃之界。爾時、世尊重攝此義、而說頌曰、漏盡心解脫 任持最後身 名有餘涅槃 諸行猶相續 諸所受皆滅 寂靜永清涼 名無餘涅槃 衆戲論皆息 此二涅槃界 最上無等倫 謂現法當來 寂靜常安樂。

吾從世尊聞如是語。苾芻、當知由二纏故、令諸天人一類怯劣、一類勇猛。有慧眼者能正觀察。云何二纏。謂有見纏、無有見纏。云何天人一類怯劣。謂有天人愛有樂有、欣有喜有、爲滅有故、說正法時、不能恭敬攝耳聽受、亦復不能住奉教心、不能隨順修如實見、唯生怯劣、退轉驚怖。我等爾時、當何所有。我等爾時、當如何有。如是天人一類怯劣。云何天人一類勇猛。謂有天人怖有厭有、欣求無有、乃名寂靜微妙、如是天人一類勇猛。云何名爲有慧眼者能正觀察。謂聖聲聞如實觀察、既觀察已、不於如實而生憍慢、不依如實而生憍慢、不因如實而生憍慢、不恃如實而生憍慢。如實見已、便生厭背。既厭背已、便能離欲。既離欲已、便得解脫。得解脫已、便自了知我生已盡、梵行已立、所作已辦、不受後有。作是思惟、世尊爲彼喜樂諸有阿頼耶者、恒爲常見、所繫縛者、令滅有故、所說正法微細甚深、難見難悟、寂靜勝妙、非諸尋思所行境界。是諸審諦慧者所證、一切世間真實對治、謂能除滅

本文と訂正文を比較すると、後者には686字（下線部）が追加されていることがわかる。前述の通り、『本事経』は「一法品」「二法品」「三法品」の138段で構成されており、『同』巻3から「二法品」が始まる。「二法品」は49段で構成されており、巻3は第1～18段、巻4は第19～35段、巻5は第36～49段である。脱文箇所は巻3の第18段に該当する。第18段は、有余と無余の二つの涅槃戒について説かれているが、本文の該当箇所である最後の偈頌部分は、「二纏」に関する内容で結ばれているため²²⁾、涅槃戒の内容と合わない。

『本事経』は、「吾從世尊聞如是苾芻當知」という長行で始まり、その内容をまとめた偈頌で結ばれていることは前述の通りである。訂正文を見ると、下線部①の最後は有余涅槃と無余涅槃の内容の偈頌で結ばれ、下線部②では改めて二纏、即ち有見纏と無有見纏について説かれている。

つまり、本来『本事経』巻3は「二法品」の第1～19段までが説かれ、巻4と巻5を合わせたこの品は50段で構成されるのが正しいということになる。

『大正蔵』の『本事経』巻3の脚注には、「雖復等六百五十六字今明本與宋本元本聖本並聖本別寫對校採録²³⁾」とある。『大正蔵』は『再雕蔵本』を底本としているが、校本として明本、宋版、元版などが使用されており、これらが656字（686字の誤り）であることを意味している。明本、宋版、元版の『本事経』巻3には686字があるが、『再雕蔵本』にのみ脱文があったことになる。

『本事経』巻3の本文の内容は、抜け落ちた686字が挿入されなければ完全な文とはならない。

憍慢渴愛、害阿頼耶、斷諸徑路、證其空性。離諸貪欲、證得究竟寂滅涅槃。作是思惟、世尊爲彼怖畏諸有阿頼耶者、恒爲斷見所繫縛者、令知業果無失壞故、所說正法現見、應時、易見、饒益、智者內證、一切世間眞實對治。謂能除滅憍 慢渴愛、害阿頼耶、斷諸徑路、證眞空性、離諸貪欲、證得究竟寂滅涅槃。（以下略）」、『高麗大藏經』38、pp.645c～646c。

22) 『本事経』巻3「由二纏所纏 令諸天人衆 一類有怯劣 一類有勇猛 有慧眼聲聞 能如實觀察 能除慢厭離 究竟證涅槃。」、『高麗大藏經』20、p.428a。

23) 『大正蔵』巻17、678b～c。『大日本校訂大藏經』では補修されていないが注記されている。

Ⅲ. 本文と訂正文が異なる理由

1. 『高麗国新雕大蔵校正別録』の内容の検討

前述の通り『本事経』巻3は、4つの錯誤があった『初雕蔵本』と『開宝蔵本』ではなく、2つの正確性が際立った『契丹蔵本』を採用している。『校正別録』にはこれ以外にも『契丹蔵本』を採用した事例がいくつか見られる。例えば、『中阿含経』巻15の校勘記には

この巻の最初にある『三十喩経』が『契丹蔵本』では『世喩経』となっているのは、単に「卅」の字が誤って伝わり翻訳したもので「三十」が正しい。『初雕蔵本』の最初の「以比丘比丘尼以護六根爲守閤人」という文章で経の冒頭としており、「如是我聞」など証信と発起の2つの序文が抜けている。今、『契丹蔵本』の中で「我聞如是」以下「猶如王及大臣有守閤人舍利子如是」など凡そ35行総490字を得て、抜けた部分を補足した。その補足文を左に収録する。²⁴⁾

とあり、『契丹蔵本』に語句の誤りがあることを指摘している他に、『初雕蔵本』・『開宝蔵本』にも脱字があるとしている。すなわち、『契丹蔵本』の『中阿含経』巻15の最初は『世喩経』となっているが、これは『三十喩経』が正しく、「卅」を「世」と誤ったためだとしている。しかし、『初雕蔵本』・『開宝蔵本』の35行490字の脱文については、この『契丹蔵本』で補っている。

次に、『別訳雑阿含経』の校勘記には、

第5巻の末部分にある5経及び第6巻最初の部分にある五経が『初雕蔵

24) 『校正別録』巻15「此巻初三十喩経、丹蔵作世喩経者、但卅字之訛變也。三十爲正。國宋經初直、以比丘比丘尼以護六根爲守閤人、爲經初首而、闕我聞如是。等證信發起二序之文、今於丹蔵經中得我聞如是已下乃至猶如王及大臣有守閤人舍利子如是等凡三十五行摠四百九十字、補其闕焉。其所補文今録于左。」、『高麗大蔵經』38、616a。

本』と『開宝蔵本』にはすべてないが、『契丹蔵本』にだけある。前にある9経は『梵問経』であり、10経は『度須跋経』である。今、『梵問経』を検討してみると、大本『雑阿含経』巻44の最初の部分と同本異訳であり、「度須跋経」は大本『雑阿含経』巻35の16幅以下にある部分と同本異訳である。『初雕蔵本』と『開宝蔵本』にこの経がないのは、抜けていただけである。今、『契丹蔵本』によってこれを加えて、2巻を入れる。²⁵⁾

とあり、『初雕蔵本』と『開宝蔵本』にあった脱文を『契丹蔵本』で補い、『同』巻5の巻末から巻6の最初に編入させている。

他方、『護淨経』では、『契丹蔵本』の脱文を『初雕蔵本』と『開宝蔵本』で補っており、このような事例もいくつか見られた。この校勘記には「3幅5行目の『一切衆人普使聞知』以下、『初雕蔵本』と『開宝蔵本』には『一切檀越施設法会』のおよそ255字の文があり、『契丹蔵本』に抜け落ちた部分を『初雕蔵本』と『開宝蔵本』によって補足した²⁶⁾」とある。

つまり、『校正別録』の校勘記によれば、『初雕蔵本』、『開宝蔵本』、『契丹蔵本』の3種で内容を検討し、脱文がある場合はその3つの大蔵経で互いに内容を補っていた。さらに、そのことを校勘記に反映させている。

2. 『契丹蔵本』の修訂本の可能性

では、本文において脱文がどのようにして発生したのだろうか。その原因として、①本文校正時に脱文を見落とした、②本文校正終了後、その版下本の作成時に脱文を見落とした、③本文校正と『校正別録』編集のそれぞれに使われた『契丹蔵本』が異なる、などが推測できる。

25) 『校正別録』巻16「第五卷末五經、及第六卷初五經、皆國宋本所無、而丹本獨有者、前九是梵問經、第十是度須跋経。今檢梵問經者、與彼大本雜阿含經第四十四卷之初同本異譯度須跋経與大本第三十五卷十六ト已下、同本異譯、則國宋二本無此經者、脫之耳。今依丹藏、加之分入二卷焉。」、『高麗大藏經』38、626a～b。

26) 『校正別録』巻20「第三幅五行一切衆人普使聞知已下國宋兩本有一切檀越施設法會、等凡二百五十五字之文。丹藏無其文切、今爲看舊丹藏經者、具録于左。」、『高麗大藏經』38、647a。

①については、『校正別録』に収録されている經典の脱文部分が確実に補足されていることから、その可能性は低い。続く②については、『契丹蔵本』の装丁は卷子装で1版1紙、1紙27乃至28行、1行17字であり²⁷⁾、これを1行14字に変更する際に脱文が生じた可能性は否めない。しかし、脱文686字は『契丹蔵本』の装丁では41行分、即ち1張と13～14行分になる。これほど多くの文字を見落とすということは考えにくい。

最後の③について検討してみる。『校正別録』に収録された44部の經典の本文と訂正文を比較してみると、正字・俗字の違い、1行の字数の違い、脱字脱文などが双方で見つかった。44部のうち、双方で相違がなかったのは7部のみと少なかった。本文校正後の『校正別録』を雕造する際には再校正がなされていたことから²⁸⁾、何らかの方法で『本事経』巻3にある脱文を補足したと推測できる。そうだとすれば、どの本で補足したのだろうか。考えられるのは、『開宝蔵本』や『初雕蔵本』のように、部分的に修訂された『契丹蔵本』の存在である。

1) 『開宝蔵本』と『初雕蔵本』の修訂本

『開宝蔵本』の装丁は1版1紙、1紙23行、毎行14字の卷子本である。この『開宝蔵本』を底本として、『初雕蔵本』、『再雕蔵本』、『金版大蔵経』(以下、『金蔵本』と略称)²⁹⁾などが後に雕造された。

現在まで残っている『開宝蔵本』(中国、日本、アメリカなどに12巻の他、断簡が数点確認³⁰⁾)と『初雕蔵本』(日本³¹⁾や韓国³²⁾などに2,700巻ほど)、『金蔵本』(山西省趙城県の広勝寺に1蔵[約5,000巻³³⁾]残されている)などを比

27) 京都仏教各宗連合会編『新編 大蔵経—成立と変遷—』、法蔵館、2020、p.104。

28) 拙稿、2020年、pp.312～315の〈表1〉参照。

29) 『金蔵本』は、金の皇統9年(1149)から大定13年(1173)ごろまでの25年をかけて雕造された私版の大蔵経である。京都仏教各宗連合会編、前掲書、p.100。

30) 京都仏教各宗連合会編、前掲書、p.96。

31) 南禅寺蔵本1,715帖、対馬の長松寺蔵本586巻(『大般若波羅蜜多経』のみ)などがある。

32) 2000年の時点で、123部224巻が確認されている。千恵鳳「高麗典籍의 集散에 관한 研究」『高麗時代研究』Ⅱ、한국정신문화연구원、2000、pp.361～370。

33) 京都仏教各宗連合会編、前掲書、p.99。

較すると、『開宝蔵本』は何度か修訂されているという。

例えば、『開宝蔵本』の『雑阿含經』卷30（中国国家図書館所蔵本）の第2張第9行（実際には卷30の第6張の第9行）には「四種神力」とある。『初雕蔵本』と『再雕蔵本』は、『開宝蔵本』と同じ「四種神力」であるが、『金蔵本』のその部分は「四禪神力」である。このことから、『開宝蔵本』は当初「禪」であったが、その後「種」に修訂されたことになる³⁴⁾。つまり、「禪」と記載されていた修訂前の『開宝蔵本』を底本として『金蔵本』が、「種」と記載された修訂後の『開宝蔵本』を底本として『初雕蔵本』と『再雕蔵本』がそれぞれ雕造された。

『開宝蔵本』と『初雕蔵本』、『再雕蔵本』、『金蔵本』の同一經典を比較すると、上記のような違いが他にも見られるため、『開宝蔵本』には初本、修訂本、再刻修訂本などが存在すると言われている³⁵⁾。

また、『初雕蔵本』には国前本と国後本があるとされている。これは『校正別録』に収録されている『根本説一切有部毘奈耶破僧事』卷13の校勘記に、「国前本と『開宝蔵本』にある脱文を国後本と『契丹蔵本』で補充した³⁶⁾」と記されていることに由来する。『校正別録』の中で国前本と国後本について言及しているのはこの部分のみであるが、『初雕蔵本』にも『開宝蔵本』と同様に修訂本があったとしてもおかしくはない。国前本と国後本の違いについては、前者は『開宝蔵本』を底本として、後者は『契丹蔵本』を底本としてそれぞれ雕造されたという見解がある。他にも文宗代を分岐点に置き、前者はそれ以前に雕造されたもの、後者はそれ以降に雕造されたものとする見解などがある³⁷⁾。

34) 柳富鉉『고려대장경의 구성과 제본 및 판각에 대한 연구』、시간의 물레、2014、pp.231～232。

35) 柳富鉉、前掲書、p.158。

36) 『校正別録』卷30（『高麗大藏經』38、721a～b）

37) 国前本と国後本に関しては、①国前本は顯宗朝の『初雕蔵本』、国後本は文宗から宣宗朝までの『続雕本』であるという見解（李富華『漢文仏教大藏經研究』、宗教文化出版社、2003年、p.120）、②国前本は『開宝蔵本』を底本に顯宗朝はもちろん『契丹蔵本』が輸入された文宗17年（1063）以前までに板刻されたものであり、国後本は『契丹蔵本』が輸入された後にそれを底本として板刻されたものだという見解（千恵鳳『羅麗印刷術의 研究』、景仁文化社、1980、p.68）、③国前本は顯宗朝に韓彦恭が持ってきた『開宝蔵本』によった

国前本と国後本の問題はすべて解明されているわけではないが、その存在は『初雕蔵本』にも修訂本があることを示すものである。『開宝蔵本』や『初雕蔵本』に修訂本が存在するということは、『契丹蔵本』のその可能性も否定できない。

2) 高麗への『契丹蔵本』の受容

高麗にはいつからどれくらいの『契丹蔵本』が伝来したのだろうか。『契丹蔵本』は興宗の重熙年間（1031～54）から造成が開始され、同20年（1051）頃には大部分が完成し、その後追雕が行われ道宗の咸雍4年（1068）に完了した³⁸⁾。

『契丹蔵本』の高麗への伝来は、文宗17年（1063）から始まる。王はその年、契丹から届いた大蔵經を賜るため法駕を備えて西部で迎えている³⁹⁾。その後、咸雍8年（1072）12月に遼から仏經一藏を賜り⁴⁰⁾、肅宗4年（1099）4月には遼の觀察使蕭朗が高麗を訪問し大蔵經を贈っている⁴¹⁾。睿宗2年（1107）には遼から派遣された大高存壽により大蔵經が贈られた⁴²⁾。睿宗代（1106～1122）

もの、国後本は文宗5年（1051）頃から再度刻印して文宗17年（1063）以後『契丹蔵本』も参考にして造成されたものだという見解（金斗鍾『韓國古印刷技術史』、探求社、1981、p.3）、④国前本は顯宗朝に『開宝蔵本』を底本としたもので、国後本は文宗朝に『契丹蔵本』によって雕造したものとする見解（呉龍燮、前掲論文、1986、p.229）、⑤国前本は顯宗朝の版本であり、国後本は文宗朝の版本であるという見解（鄭駟謨「高麗初雕大藏目錄의 復元」『書誌學研究』第2輯、1987、p.23）、⑥国前本は『契丹蔵本』の伝来した文宗17年（1063）以前に『開宝蔵本』と『統貞元録蔵本』を底本に板刻された『初雕蔵本』初本であり、国後本は『契丹蔵本』が伝来した文宗17年以後に『初雕蔵本』初本の版木が修訂・補刻・改刻され印出された『初雕蔵本』修訂本であるという見解（柳富鉉、前掲書、2014、p.157）などがある。

38) 京都仏教各宗連合会編、前掲書、p.104。

39) 『高麗史』卷8 世家8 文宗17年3月丙午条「契丹送大藏經、王備法駕、迎于西郊」。同様のことが『遼史』卷151にもあり、清寧8年（1062）に来貢して12月に仏經一藏を徽（文宗の諱）に下賜している。この年に賜った大蔵經が、翌年の3月に高麗に到着したと考えるのが妥当である。『遼史』卷151「清寧八年來貢十二月以佛經一藏賜徽」

40) 『遼史』道宗本紀 咸雍8年12月庚寅条「賜高麗佛經一藏」

41) 『高麗史』卷11 世家11 肅宗4年夏4月丁亥条「遼遣横宣使寧州管内觀察使蕭朗來 兼賜藏經」

42) 『高麗史』卷12 世家12 睿宗2年正月庚寅条「遼遣高存壽來賀生辰、仍賜大藏經」

には慧照国師が詔を奉じて契丹に留学し、大蔵經3蔵を持ち帰って定恵寺、海印寺、許参政宅に各1蔵を安置した⁴³⁾。以上、史料によれば文宗代から睿宗代までの60年もの間に、全部で7蔵もの『契丹蔵本』が高麗に伝来していることがわかる。

また、『契丹蔵本』は正蔵以外にも、咸雍7年(1071)の刊記がある『釈摩訶衍論通贊疏』や『釈摩訶衍論通贊疏科』など章疏類の開版も行われている。

『開宝蔵本』や『初雕蔵本』の修訂本があること、また『契丹蔵本』も章疏類の開版がなされていることから、正蔵の修訂本の存在は十分に考えられる。1063年からの60年間に『契丹蔵本』も修訂がなされ、高麗にはその初本と修訂本のどちらも伝来していた可能性を示唆できる。そして、『再雕蔵本』の雕造には、守其らによる校勘作業において当初は『契丹蔵本』の初本が使用されていたが、訂正文の作成にはその修訂本が使用されていたのではないかと推測できる。

IV. おわりに

以上、『本事経』巻3の本文と訂正文の違いについて検討した。本文にあった686字の脱文は「二法品」の18段の部分であった。『本事経』は「吾從世尊聞如是苾芻當知」という長行で始まり、その内容をまとめた偈頌で結ばれ、それで1段を構成している。脱文した686字の内容を見ると、有余涅槃・無余涅槃の長行の後半部と偈頌、そして有見纏・無有見纏の長行の前半部分に該当する。つまり、『本事経』は138段で構成され、『同』巻3は「二法品」の1段から19段までが説かれていることが正しい。この点はすでに指摘されている通りである。

しかし、『再雕蔵本』の場合、『本事経』の本文からして全137段で構成されているという見解があるが⁴⁴⁾、それは訂正文を確認していなかったために生じ

43) 『三國遺事』巻3「本朝睿廟時。慧照國師奉詔西學。市遼本大藏三部而來。一本今在定恵寺海印寺有一本許参政宅有一本」、『大正蔵』49、p.994b。

44) 鄭承碩編著、前掲書、1998、pp.557～559。

た誤りである。『再雕蔵本』が内容面において高い評価を得ている理由の一つは、『校正別録』が入蔵されているからであるが、本文と訂正文の内容を詳細に比較しなければ正しい評価はできない。

また、『中阿含経』巻15、『別訳雑阿含経』、『護淨経』などの校勘記の内容を見ると、脱文があった際には他の大蔵経で互いに補い、さらにその補完内容は確実に校勘記に反映させなければならなかった。ところが、『本事経』巻3は本文に脱文があったにもかかわらず、校勘記にその記載がなく、訂正文では脱文が補完されている。このことから、校勘記に記載の有無が生じた原因が、本文の校正と『校正別録』の編集とで使用された『契丹蔵本』がそれぞれ異なるのではないかと推測に至った。これに関しては、『開宝蔵本』や『初雕蔵本』には修訂本の存在が認められることから、『契丹蔵本』にも同様に存在する可能性を指摘した。ただ、『契丹蔵本』の全体像が現在まで不明であるため推測の段階であり、その可能性を示唆するだけにとどめておく。今後、新たな『契丹蔵本』が発見されれば、再びさらなる検討を進めたい。